

テゼからの手紙 2025 年

あらゆる希望を超えた希望

ブラザー・マシュー（テゼ共同体院長）

テゼやその他の場所(1)で、日常生活の中で厳しい現実と直面している青年たちの話を聞いていると、私は自問するのです、彼らはどのようにして生き続ける力を見出しているのだろうか。彼らが紛争地帯で暮らしている場合、その問いはさらに切実なものとなります。

彼らの回復力と忍耐力は、それが不可能と思われるような状況の中でどこから来るのでしょうか。彼らに耳を傾けていると、信仰を生きる人々に希望が育まれることを可能にしているのは神への信頼だと知らされました。そしてイエスの復活によって、死がけっして終わりではないという確信が芽生えるのです。

主の復活への信頼は、疲れが最終地点ではないという希望を与えます。私たちはそれ以上の何かに招かれているのです。若者たちが私と分かち合いたいと願ったのは、この希望のことです。希望とは、すべてが失われたと思われるときに、新しいいのちが生まれることを期待する、あらゆる希望を超えた希望です(2)。

マリアは賛美と希望の叫びの中でこう歌いました。「神はその腕で力を振るい、高ぶる者を打ち散らし、身分の低い者を高く上げられる。神は飢えた者を良いもので満たし、富める者を手ぶらで追い返される（ルカ 1：51-53）。そう、私たちはあえて彼女とともに歌い、状況が変わるように祈るのです。神が沈黙しているように思えても、突然、道が開かれることがあるのです。(3)

同時に、たとえ大きなことではなくても、私たちにできることに着手するのです。そのようにして、苦境にある人、戦下に置かれ人、国を追われた人に連帯のしるしを示すのです。これこそが、あらゆる希望を越えて希望を抱くことを可能にするのではないのでしょうか。

以下に記す考察の大部分は、昨年一年間、戦争中の国や紛争地帯で暮らす青年たちとの出会いや会話から生まれたものです。自分の経験や考えを分かち合ってくれた人たち、そして注意深く助言してくれたテゼのもっとも若いブラザーたちに心から感謝します。

Brother Matthew

希望する勇気

神の愛に信頼しようと切望するとき、自分の周りで見たり感じたりするものは、しばしばその愛と矛盾しているように見えます。私たちは、すでに与えられているものと、まだ来ていないものとの間に挟まれています。この空間は必ずしも快適ではありません。しかし、この空間が実現の希望に向かって開かれるとき(4)、私たちの中で何かが解放されます。

希望には忍耐が必要です。使徒パウロはこう記します。「私たちは、目に見えないものを望みます」(ローマ8:25)。神の時に満ちるものに目を向けながらも、「外の軋轢、心の中の不安」(2 コリント7:5) に悩まされる私たちに、そこから逃げるのではなく、そこに身を置き続ける勇気があるでしょうか。

「アブラハムは、希望するすべもなかったときに、信じました」(ローマ4:18)。多くの信仰者の父であるアブラハムは、合理的な望みをはるかに超えて神の約束を信じました。アブラハムとその妻サラは、彼らにとって不可能と思われたことを受け入れました。

祖国が戦争で荒廃し、住民が追放の危機にさらされ、自らも獄中にあったとき、預言者エレミヤは未来へ賭けました。神がその民を見捨てないと確信して、畑を買ったのでした(エレミヤ32:6-15)。

このような驚くべき希望の行為は、信仰をより現実的なものにします。それは、まだ目に見えず、不確かさえあるものへの確固たる信頼です。そのような希望を私たちは抱くことができるでしょうか。それが最終的に、喜びの源泉を再び開くことになるのです(5)。最も複雑な状況においてさえ、あえて望みもしなかったことが現実になることがあるのです。

今日、希望に満ちた信じがたい取り組みが(6)、戦争で荒廃した多くの国で始まっています。

希望を生きる人々に耳を傾ける

希望の意味をよりよく理解するためには、苦難と暴力のただ中に生きる人々に耳を傾ける必要があります。神が私たちを導いてくださるのは、彼らの声を通してではないでしょうか。

テゼのブラザーたちとウクライナを訪れたとき、教会のある指導者が私たちに語りました。「祈りが癒しの空間を開くのです」。この言葉に心打たれました。人々の痛みに毎日直面している彼は、信者たちが新しさを迎え入れるために心を開いていられるのは、彼らの内面の豊かさだと言うのです。

これは、傷や悲しみを克服する扉を開き、癒しへの希望を呼び覚ます一つの過程です。もちろん、すぐに結果が出るとは限らず、おそらく他の手段を伴うことも求められるでしょう。祈りは、最も複雑な状況に直面しても、しっかりと立ち続ける力を与えてくれます(7)。祈りは、暗闇がすべてを飲み込みそうなときに、落胆の波を打ち砕きます。

フランス在住で、家族がガザにいるパレスチナ人女性が手紙をくれました。「傷ついた人や弱い人を運ぶ愛は、新たな力を与えてくれます。福音書に登場する体の麻痺した人(8)が、友人たちとその信仰によって運ばれる姿を思い浮かべます。祈りは抵抗の手段でもあり、それは私にとって重要なことです。しかし、私も人間です。家族2人の訃報が届いたとき、怒りの激情に圧倒され、叫び、泣きました……。気を取り戻したとき、苦しみや絶望の中にこそ神がおられ、神が私たちを運んでくださることを知りました。」

この夏、テゼを訪れた彼女はこう語りました。「毎朝、憎しみよりも愛する強さを見つけるために祈ります」。この言葉は、道を照らす灯火です。

紛争で荒廃したアジアの国の若い女性が私に語りました。「私たちは打ちのめされていますが、福音の中に慰め

を見出しています。神の民はどれほど逃げまどったことでしょう。それでも、どんなに困難な状況であっても共同体は生まれました。神にはもっと大きな計画があるのかもしれませんが、私たちは一日一日を何とか生きねばなりません。今を生きることができるのは贈り物であり、いのちがあるのはそれを精一杯生きるためだという証しです。祈りのうちに平和の源があり、それによって私たちは互いに励まし合い、分かち合い、連帯することに意味を見出します」。

レバノンからこんな言葉を聞きました。「私の母は希望の証です。どんなことがあっても、彼女はいつも立っていました。今日の私があるのは、母のおかげです。母は神への信仰と祈り方を教えてくれました。信頼から生きている人は、信頼を映し出します。信頼の泉から飲み、証人となっているからです。」

それぞれの状況の中で、希望の証人は誰でしょうか。彼らの言葉に耳を傾けるのです。

希望への努力

計画が挫折し、希望が打ち砕かれたとき、私たちはどのようにそれに応答するのでしょうか。イエスは、希望を生きる人であり続けるための鍵を示してください。

お腹を空かす大勢の人々を前にして、イエスは彼らを「深く憐れまれた」。つまり、人々に向って「彼の心は出て行った」(9)。そして、人々の必要を満たしました。

困難な状況下にあっても、諦めようとしなくて、私たちの中に希望が生まれます。それは消極的にただ待つこととは正反対であり、葛藤を引き受けることです(10)。他の道はありません。希望への単なるあこがれであっても、それは人間的に可能なことから神にとって可能なことへと私たちを導きます。

キリストのうちにある希望は、神の未来において満たされるものを予見させます。それは船の錨のようなものです(11)。嵐が荒れ狂うとき、それは私たちをしっかりと支え、自分が受けた召命と、自分に託された人々に対する誠実さの小さなしるしを私が生きることを可能にします。それはまた、直面する逆境から私たちを守るヘルメット(12)のようなものです。

『テゼの規範』には、「隣人への愛を簡単に公言しながら、分裂したままであるキリスト者の分離という愚かさについて決して身を委ねてはならない」と記されています。ブラザー・ロジェにとって、キリスト者の一致(13)は、決して単なる目標ではなく、人類家族を平和へと導く道であったのです。(14)

テゼ周辺の地味なツゲの茂みが、ここ数年、寄生虫によって2度も荒らされたにもかかわらず、突然、再び命を吹き返しつつあります。見かけ上は枯れていたのに、灰色が緑色に変わるにつれて、新たな小枝が伸びています。自然は生き残るために戦い、それは私たち自身の希望への戦いを映し出し、励ましています。被造物に対する希望(15)、そして神の良き被造物によってもたらされる希望は、人間に向けられた希望と共にあるのです。(16)

希望を生きる人々のところにとどまる

相互理解が不可能と思われる状況に直面すると、希望はいとも簡単に窒息してしまいます。疑惑の念が作り出される時、そこには他者を不信へと誘惑する危険があります。

これは地域社会、教会、家族、そして社会や国でも起こりうることです。このような力学は、隠されている場合もあれば、公然の場合もあり、それは常に私たちの力を消耗させます。しかし、不正義に直面し、そこで犠牲者が生じないように、悪を非難すべきときがあります。(17)

希望を持ち続けるために、私たちは互いを必要としています。希望が花開くのは、私たちが他者の必要性に気を配っているときです。最大の逆境の中にあっても、生きることを選択し、微笑み、毎日可能な小さなことを提供する人々が存在するのです。

希望は真理(18)や正義と結びついています。それが神の特質だからでしょうか。私たちは、イエスの生涯、死、復活の中にそれらを見ないでしょうか。希望を育むには、現実をありのままに直視し、それを神の約束に照らして理解する必要があります。(19)

紛争地帯に住むある青年が私にこう言いました。「カフェで本を読んでいたら、ロケット弾が飛んできました。人々は恐怖のあまり外に飛び出しましたが、私はそこに残って本を読み終えることにしました」。シェルターを探すことももちろん賢明な選択肢だったでしょうが、この話を分かち合うことは、戦争における不可避性に対する希望の抗議なのです。

テゼのブラザーの一人が私にこんなことを話しました。「希望は挑発的です。そしてそれ以上に伝染します。希望の反対は、無関心やあきらめです。最近、戦時下にある私の国を訪れたとき、人々の悲しみと心配とストレスに満ちた顔を見ました。そこで「私に何ができるだろうか」と自問しました。そして、ある考えが浮かびました。車を運転していて優先権があっても、必ず停止して前の車を優先することにしたのです。必要なのは5秒だけです。しかし、こんな小さな行為が人々の顔を反応させ、彼らの痛みを少し和らげるのを見たのです」。

「私たちの中のすべてが戦争と死に抵抗している……。私たちの中のすべてがいのちと美を切望している。」(20)

復活の希望

今、私はどこにいますのでしょうか。聖金曜日の十字架の下でしょうか。復活日の喜びの中でしょうか。それとも聖土曜日、どこへ向かえばいいのかわからずに待っているのでしょうか。

どこに立っていても、希望の道を垣間見ることができるでしょうか。すべての人のために愛のうちにいのちを捧げ、暴力、憎しみ、死のあらゆる力よりも強い愛を示されたイエスを見つめるとき、私の前に希望が開けてきます。

希望は、状況を分析することによって成り立つのではなく、ときには信頼のちらつく灯火の中にあります。イエスの友人たちがそうであったように、この灯火はもろいものではありませんが、最も深い夜にも燃え続けます。彼らの多くは、イエスの最大の試練の時にイエスを見捨てました。しかし、イエスの愛によって、彼らは戻ってきたのです。

もし私たちが復活されたイエスに気づくことさえできれば！しかし、イエスの存在は私たちの認知にかかっているわけではありません。マグダラのマリアが気づかなかったように、絶望は時に私たちを盲目にします。復活のイエスはマリアに尋ねられました。「なぜ泣いているのか」「だれを捜しているのか」と。(ヨハネ 20:15)。こ

の二つ目の問いは、ヨハネによる福音書の最初の言葉「何を捜しているのか」(ヨハネ 1:38)と呼応しています。イエスが人間の最も深い悲しみと死の中に入られた後に、意味を求めることは、存在(21)を求めることになったのです。

死からよみがえり、神のうちにおられるイエスは、私たちをご自身のもとに引き寄せられます(22)。深い悲しみのときも、喜びのときも、復活されたイエスは私たちの内の深い所で私たちと出会い、御父との関係、聖霊による互いの交わりへと私たちに開いてくださいます。私たちはもはや絶望の虜ではありません。新たないのちへと招かれたのです。

パウロはこう書いています。「希望は私たちを欺くことはありません。私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」(ローマ 5:5)。その愛に生きるのです。聖霊がいつも私たちを導いてくださいますように！

希望の巡礼、平和の巡礼

復活への信仰によって、多くの人々が苦難の中にあっても希望を抱いてきました。それは、自分の不可能を越える力の源であり、それは、他者に心を向けさせ、具体的な行動へと私たちを駆り立てます。

イエスの復活を信じることは、大きな勇気と大胆さを必要とします。それは、今日私たちの周りにある死と破壊の現実には麻痺しないように努力することなのです。

絶望的に見える状況から、神は新しいものを創造なさいます。神は死から生を、そして争いから和解さえももたらします。

イースターの朝早く、イエスの友人であった女性たちは墓を訪れるときに「誰が墓の入り口から石を転がしてくれるだろう」と案じていました(マルコ 16:3)。私たちの内に新しいいのちが生まれるように、神に転がしていただくべき石とは、私たちの人生にとって何でしょうか。

その新しいいのちは、私たちが立ち上がるのを助け、他の人たちとともに旅するよう導きます。そのようにして、私たちは、自分の内に運ぶ希望の巡礼者となります。これもまた平和への希望でないでしょうか。「キリストは私たちの平和です」(エペソ 2:14)。キリストがこう言われるのを聞くことができるでしょうか。「私は、平和をあなたがたに残し、私の平和をあなたがたに与える(23)。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな、恐れるな」(ヨハネ 14:27-28)。

平和の巡礼者(24)として、私たちは、正義なくして真の平和はないことを知っています(25)。希望がもたらす平和の心は、私たちを内的に自由にします。そして、聖霊に助けられて忍耐するとき、私たちはいのちを愛し、不正義に抵抗します。

いつの日か、ザカリアの祈りを歌うのです。占領地に暮すこの老人は、予期せぬ誕生を喜び、このように祈り祝いました。「神の憐れみの心によって、高い所からの夜明けの光が私たちを訪れ、暗闇と死の陰に座している人々を照らし、私たちの歩みを平和の道に導く」(ルカ 1:78-79)。

あらゆる希望を超えた希望に歩み出すのです。

復活のキリスト

聖霊の臨在によって

あなたは私たちの心に神の愛を注いでくださいました。

そして、私たちがあらゆる希望を超えて希望を抱くことを可能にしてくださいます。

そして、私たちの心の奥底から

少しずつ

驚くべき平安が現れます。

あなたを賛美します！

(1) 2024年5月、私はテゼの2人のブラザーを伴って、戦争で荒廃したウクライナを訪ねました。夏には、ミャンマー、ニカラグア、ウクライナの若者たちをテゼに迎え、秋には、これらの国やベツレヘム、レバノンの若者たちとオンラインで対話しました。4人のブラザーたちがその後ウクライナに戻り、ウクライナの東西を訪ねました。

(2) 「地平線の完全な不在を経験することなくして、希望はありえない、それは白昼のただ中に存在する夜のようなもので、個人だけでなく国民にも幻想を捨て去るよう強いる。」

(Corine Pelluchon in *L'espérance, ou la traversée de l'impossible* (Éditions Payot & Rivages, Paris, 2023) p. 8)

(3) 「希望とは、神の沈黙に対する人間の応答である。」

(Jacques Ellul, quoted by Anne Lécu www.revue-etudes.com/article/esperer/2477)

(4) 申命記 4.31 の注釈で、グスタボ・グティエレスはこう書いている。「神は契約を忘れない。忠誠とは、何よりもまず記憶である。忠実であるとは、まず第一に思い出すことであり、献身の約束を忘れないことであり、伝統の感覚を持つことである。契約への忠誠は、契約の源とその要求を覚えていることを前提とする (中略) しかし、真の忠誠はそれ以上のことを意味する。それは、一見すると、あまり明確ではないように思えるが、将来への展望を求める。記憶を持つことは、過去に固執し続けることではない。昨日を思い出すことは大切だが、それが大切なのは、あくまでもそれが明日に希望をいだくの役に立つからだ。 (中略) 忠実さとは、主体性を持たずに決められた道をたどることではなく、それを永久に刷新し続けることである。それは私たちを革新、変化、新しいプロジェクトを描くことへと導く。(Gustavo

Gutiérrez, *El Dios de la vida*, Ediciones Sígueme, Salamanca, 1992, pp. 82-83).

(5) 戦争の中で生きる若者たちとの会話の中で、彼らの多くが喜びと力の源としての歌の重要性を語っていた。この手紙は、2024-2025年にエストニアのタリンで開催されるヨーロッパ青年大会で公表されたが、1991年にエストニアの平和的な独立の回復に大いに貢献した「歌う革命」を忘れてはならない。人々は歌いながら通りに出て、脅威に立ち向かった。

(6) テゼのブラザーの一人は、荒廃した地で出会った人がこう語るのを聞いた。「私の中には創造的な怒りが宿っている」。それは、現状を変えるために、何かひとつでも小さなことをしたいと彼女を駆り立てる力だった。

(7) 「霊的指導者シルワン師から、長老ソフロニー・サハロフは霊的生活の基礎となる多くのことを学んだ。二つのことが際立っている。祈りにおいて、経験するものが荒涼とした空虚さだけであるときに、神に見捨てられたという感覚にどう向き合うか、そして、苦しんでいる世界のための叫びの祈りに伴う苦悩にどう対処するかということ。前者は、後にサハロフがさらに発展させることになる「神・放棄」の概念によって、後者は、祈りの中でシルワン師に啓示され、彼から弟子に伝えられた「地獄に心を留め、しかし絶望するな！」という助言によって意味が与えられた。(Norman Russell, *Theosis and Religion* (Cambridge University Press 2024), p. 169)

(8) マルコ 2:1-12 参照。あらゆる障壁を乗り越え、家の屋根を突き破って友人を助け、イエスのもとに連れて行こうとした人たちの希望の強さに心を留めよう。

(9) ここで「深く憐れむ」と訳されるギリシャ語の動詞は感情的に非常に強い。必要に対する温かい共感を示している。適切な訳語を見いだすのは難しいが、そこには憐れみ、哀れみ、同情など、それらすべてが含まれる。しかし、「彼の心は人々に向かって出て行った」というのは、この動詞が意味する直感的な反応をより完全に表現しているのではないだろうか。マタイによる福音書 (14:14、15:32、18:27、20:34 参照) では、この動詞は単に感情や感覚を指すだけでなく、必要を満たす実際の反応も意味している。この場合、イエスは病人を癒し、群衆に食事を与える。感情は思いやりと具体的な行動につながる。この動詞には、一言で言えば福音が含まれている。

(10) 1 テモテ 4:10 参照。「私たちが労苦し、葛藤するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である神に希望を置いているからです。」

(11) ヘブライ 6:19 参照

(12) 1 テサロニケ 5:8 参照

(13) シノダリティ（ともに歩む）をテーマとしたシノドスによって、カトリック教会は自らの中にすでに存在する多様性を認識し、大切にすることに焦点を当てた。このシノドスにおける他教派の代表団の役割は重要であった。このことは、キリストを愛するすべての人の一致に向けた道におけるエキュメニカルな召命に、新たな希望を与えるものではないだろうか。

(14) テゼは戦時中に創立された。私たちが異なる教派、国、文化、年齢のブラザーとして生きようと努力する「交わり（コムニオン）のたとえ」には、人類家族の分裂に直面する中で希望のしるしであり続けるために、絶え間ない刷新が求められる。

(15) ローマ 8:21-23 参照

(16) 気候変動と生物多様性の喪失という課題に直面し、どのように、すべてが繋がっている共通の大地への配慮を深めることができるだろうか。

(17) 私たちのテゼ共同体は、何人かのブラザーの虐待や暴行に対する告発に直面し、真実を確認する道を歩み続けてい

る。苦しみ、声を上げた人々の勇気は、私たちに彼らから学ぶことをさらに求めさせる。多くの場合、彼らは何度も新たな希望と人生を摸索する。テゼ共同体は、テゼやその他の場所で開かれる集会をすべての人にとって安全なものにし、また、関連する問題に対する意識を高めるために、可能な限りのことを行うようつとめる。私たちはまた、「認知と補償のための委員会」が行う被害者への傾聴と調停の働きに感謝している。

(www.taize.fr/protection)

(www.reconnaissancereparation.org/)

(18) 「希望は真実と結びついていると信じる。死への展望を受諾するまでは、私は希望を持つことができなかった。これはあらゆる状況に当てはまる。キリスト者である私たちには、政治的、環境的、人道的に絶望させられるような状況から逃げる傾向がある。それらを恐れることは普通のことだ。しかし、希望は、私たちがこれらの状況の現実の中にしっかり立ち、真実に目を向けることを促してくれるように思う。ジョルジュ・ベルナノスは、英雄的な徳としての希望について多くのことを語っている。それは、私たちを逃げ出すことから行動へと駆り立てる徳であり、自分たちが善だと知っていること、あるいは信じていることのために戦うよう招く。希望は私たちを神の約束へと導く。」 (Clémence Pasquier, interview by Clémence Houdaille, La Croix 11/10/2024)

(19) ケニアで一番多い民族の言語であるキクユ語では、神の属性のひとつに「希望に値する」(Mwihokeku) がある。望みを託すことのできる神。「Mwihoko」が希望を意味し、「Ngai nĩ mwihokeku」とは「神は希望に値する」。

(20) 「希望が現在の危険に対処することを意味するならば、それはまた、過去にとらわれず、すべての恨みを捨てて、現在を生き、未来を信じることを教えてくれる。希望とは、最終的に私たちの魂が切望するものであり、その不在は私たちを辛辣にし、暴力的にする。雅歌に記される愛のように、欲望に捨てられた肉体に希望は再び命を吹き込む」。(Corine Pelluchon in *L'espérance, ou la traversée de l'impossible* (Éditions Payot & Rivages, Paris, 2023) pp. 13-14)

(21) 「私たちと同じように苦しみ、無き者とされた十字架の方こそが、悲劇的な人間存在を照らしてくださる……。私たちはイエスを単なる模範として見習うのでもなく、偶像化しようとしめない。私たちはイエスを、人間の姿をとり、私たちとともに苦しみ、涙する神として見る」。(Kwok Pui Lan,

theologian who hails from Hong Kong, “God Weeps with Our Pain,” in *New Eyes for Reading: Biblical and Theological Reflections by Women from the Third World*, ed. John S. Pobee and Barbel von Wartenberg-Potter (Meyer Stone Books, Bloomington, IN, 1987), p. 92

(22) ヨハネ 12:32 参照

(23) 『私は平和をあなたがたに残し、私の平和を与える』（ヨハネ 14:27）。完成した人に特有なこと、それはこの世のことですぐに心を乱さず、恐れによって困惑せず、疑いによって動揺せず、恐怖によって取り乱さず、苦しみによって悩まないことです。その人々は、まるで安全で足場のしっかり

とした岸にいるかのように、押し寄せる波やこの世の嵐に出会うときにも、信仰の風の中で、揺らぐことなくしっかりと立ち続けます。キリストは、苦難の中を通り抜けた人々の心に内なる平和を注ぎ、キリスト者の霊にこのような確かさをもたらされました。」（ミラノのアンブロシウス：『来てください 沈むことのない光』サンパウロ 163p）

(24) www.taize.fr/pilgrims-of-peace 参照

(25) 詩編 85:11 参照。「揺るぎない愛と誠実は出会い、正義と平和は口づけを交わす」。

テゼに長期間滞在する

テゼにおける集いは、18 歳から 29 歳までの若いボランティアが、数週間から 1 年という長期にわたって滞在することによって成り立っています。ブラザーたちは、共同体の生活で最も重要な以下のことを彼らと分かち合っています。

■共に祈る

一日三回の共同の祈りなしには、テゼでは何事も成り立ちません。また、ボランティアはこの祈りによって、訪問者すべてを迎えることができるのです。

■共に共同体の中で生きる

多様性の豊かさを分かち合いながら、各大陸、各教派の青年たちと小さな一時的な共同体を形成します。

■共に他者に奉仕する

若い人たちがテゼで歓迎されるように、訪問者をもてなします。

www.taize.fr/volunteering

信頼の旅：2025 年

- 日曜日から日曜日まで、18 歳から 35 歳までの青年を対象とした若者のためにテゼで開かれる国際集会
- 4 月 13 日～27 日：聖週間とイースター週間。
- 7 月 13 日～18 日：若いムスリム（イスラム教徒）とキリスト者の友好の集い
- 7 月 30 日～31 日：ローマで行われる「ユース・ジュビリー」の期間中開催されるテゼの歌と祈り。
- 8 月 17 日～24 日：正教会の信仰の分かち合いと証しの一週間
- 8 月 24 日～31 日：18 歳～35 歳までの青年のための黙想の週
- 2025 年 12 月 28 日～2026 年 1 月 1 日：ヨーロッパ青年大会。開催地：パリ
(www.taize.fr/date)